

KINO 徒然通信

2025. 2

みなさまへ

まもなく待ち遠しい春がやってきますね、只今「どうすればよかったか?」「敵」がロングラン上映中ですが、キノも新学期が始まります。会員募集も2月22日～始まりました。ご利用いただけるのは6月1日～の1年間なのでご利用までもう少しお待ちいただきますが、今年1年たくさん映画見よう! って思っていたら嬉しそうです。

先日、アメリカとの国境近くにあるメキシコの小学校が舞台の「型破りな教室」をご覧いただいたお客さまが「いい映画でしたね…。自分もメキシコにいたことがあり、教育関係の仕事をしていたので、心にしみました」そんなお話をしてくださいました。犯罪が日常的な環境で育った子供たちが新しくやってきたファレス先生の授業に驚きながらも、「なぜ?」と疑問を持つ面白さに今まで眠っていた子供たちの感性が目覚めます。夢を持つ未来なんて考えられなかった子供たちに先生は

「必要なものは、君たち一人一人がもう持っている。それは”可能性”だ」と。

こんな映画に出会うと子供たちだけでなく、私たち大人も励まされた気持ちになってきますね。今もファレス先生はこの学校に。なんと実話の映画化なのです。

そんな学校つながりで、小学校に入学した7歳のノラを通してこの世界を生きていくことの過酷さに直面する衝撃作「playground/ 校庭」。この作品がデビュー作のローラ・ワンデル監督ですが次回作はダルデンヌ兄弟が製作に加わる注目の才能です。

そしてモンテッソーリ教育の生みの親であり、イタリア初の女性医師で、未婚の母でもあったマリア・モンテッソーリが子どもたちの権利のために闘った「マリア・モンテッソーリ 愛と創造のメソッド」。男性社会の中で勇気をもって新しい時代を切り開いたひとりの女性の物語です。ゆるやかな優しさ、強さが胸を打つ感動作です。

今号の表紙はジェシカ・チャスティンとヴェネチア国際映画祭で主演男優賞に輝いたピーター・サースガード共演の「あの歌を憶えている」。忘れたくない大切な思い出が少しずつ消えてゆく悲しみの中にいる男と、過去の傷跡を今もかかえているシングルマザー。ふたりは静かに優しく過去や人生と向き合い、寄添うことを憶えてゆく。そんなふたりを抱きしめるのは13歳の娘…。大人な映画だな、と感じます。

さあ映画の祭典米アカデミー賞の季節です。ノミネート作品が発表になり、これはどんな映画?と興味津々、ワクワクしてきます。というのも近年のアカデミー賞は様々な国の今という時代を反映させた表現力豊かな作品が増えていて、作品選定をするアカデミー会員の幅が広がり、人種の多様性や女性たちなど、改革が勧められているからです。 「ノマドランド」や「パラサイト 半地下の家族」昨年では「オッペンハイマー」「関心領域」「落下の解剖学」「ホールド・オーバーズ」「哀れなるものたち」などなど見ごたえ充分な作品が並びました。さて今年は?

キノでは上映中の「聖なるイチジクの種」「ノー・アザー・ランド」、4月11日公開の「シンシン SING SING」がノミネート中!

それではキノの新学期、大いに楽しんで好奇心いっぱいこころ弾ませてください。

シアターキノ 支配人 中島ひろみ